—文化・芸術のまち京都—

(1) 文化・芸術のまち京都

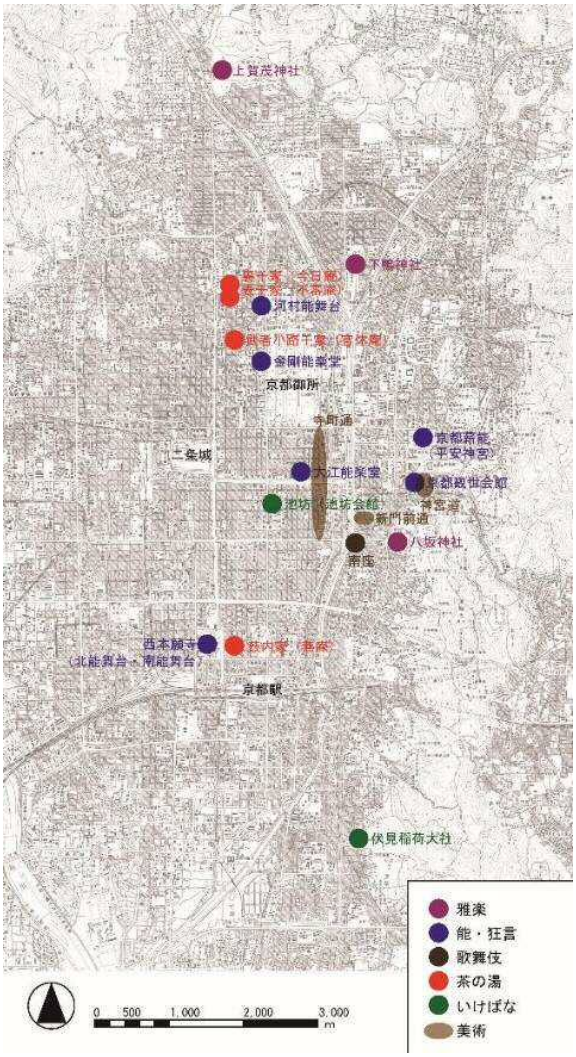

図2-50　文化・芸術のまち京都（具体事例箇所）

京都は，平安遷都以来およそ１１００年の間，わが国の都であり，それを支えてきた公家の文化が綿々と伝えられてきた。その公家文化は，室町期以降の武家文化とも融合し，京都は洗練された日本文化の中心地としてあり続けた。近世に入ると，それまでの文化に町人文化が加わった。この時代には，政治的中心は江戸に移ったが，文化的中心は依然として京都にあった。そして，これらのことを背景とした京都は今もなお，文化・芸術が広く市民生活の中に浸透し，日常的な暮らしの中に息づいている。

この項では，現在京都で行われている能・狂言などの伝統芸能，茶の湯やいけばななどの市民の間で親しまれている伝統文化，伝統に培われてきた美術などを例として，文化・芸術の地である京都の歴史的風致を示していく。

ア　具体事例

(ｱ) 雅楽（ ががく ）

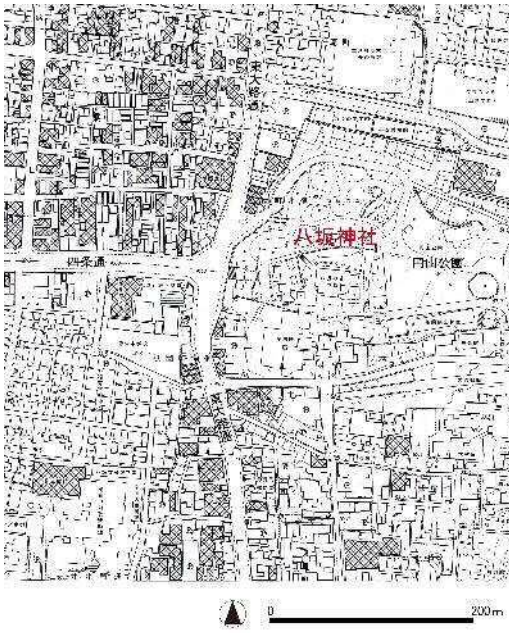

図2-51　東遊（八坂神社）

「雅楽」は，平安遷都以前に生まれた歌と舞，管・絃・打楽器が一体となって繰り広げられる総合芸術で，雅な雰囲気に包まれた日本の伝統芸能である。１０世紀に宮中のほか南都や天王寺に雅楽を司る楽人の組織である「楽所（ がくそ ）」が成立し，中世末期から近世初頭にかけて，京方（宮中・京都），南都方（興福寺・奈良），天王寺方（四天王寺・大阪）の「三方楽所」と呼ばれる雅楽の伝承組織が整えられた。

明治６年（１８１３）に雅楽に関する制限が解かれ，現在のように誰もが雅楽を演奏することができるようになると，京都でも雅楽を演奏する「雅楽会」が結成され，それ以降，京都の多くの寺社を始め全国の有名寺社で演奏が行われるようになった。

現在，各神社の祭礼や初詣などで雅楽は不可欠な存在となっており，人々が雅楽に触れる機会も多い。

『京都の祭礼』の項で示した盛夏に行われる祇園祭で広く知られている八坂神社において奉奏される「東遊（ あずまあそび ）」でも雅楽が演奏されている。この「東遊」は天延３年（９７５）に，疱瘡（ ほうそう ）の災を除くため，朝廷より奉幣したことが始まりと言われ，毎年６月に行われている。また，賀茂別雷神社（ かもわけいかずち ）（通称，上賀茂神社）や賀茂御祖（ かもみおや ）